

令和6年度 日本語教育能力検定試験 試験 I 正答

大問	小問	正答
問題1	(1)	1
	(2)	2
	(3)	1
	(4)	4
	(5)	5
	(6)	4
	(7)	3
	(8)	5
	(9)	5
	(10)	3
	(11)	1
	(12)	2
	(13)	3
	(14)	5
	(15)	3
問題2	(1)	4
	(2)	4
	(3)	1
	(4)	3
	(5)	2
問題3A	(1)	2
	(2)	3
	(3)	1
	(4)	3
	(5)	1
問題3B	(6)	1
	(7)	2
	(8)	3
	(9)	4
	(10)	4
問題3C	(11)	4
	(12)	1
	(13)	2
	(14)	3
	(15)	1
問題3D	(16)	1
	(17)	2
	(18)	2
	(19)	3
	(20)	4
問題4	問1	3
	問2	1
	問3	4
	問4	1
	問5	4
問題5	問1	3
	問2	4
	問3	2
	問4	1
	問5	4
問題6	問1	2
	問2	4
	問3	3
	問4	1
	問5	2

大問	小問	正答
問題7	問1	4
	問2	2
	問3	3
	問4	4
	問5	3
問題8	問1	2
	問2	4
	問3	1
	問4	4
	問5	3
問題9	問1	1
	問2	2
	問3	2
	問4	4
	問5	1
問題10	問1	2
	問2	1
	問3	3
	問4	2
	問5	3
問題11	問1	3
	問2	1
	問3	4
	問4	2
	問5	1
問題12	問1	4
	問2	2
	問3	3
	問4	1
	問5	4
問題13	問1	1
	問2	2
	問3	3
	問4	1
	問5	2
問題14	問1	4
	問2	2
	問3	3
	問4	4
	問5	3
問題15	問1	1
	問2	3
	問3	4
	問4	2
	問5	2

令和6年度 日本語教育能力検定試験 試験Ⅱ 正答

大問		小問	正答
問題1		(1)	b
		(2)	a
		(3)	d
		(4)	a
		(5)	b
		(6)	c
問題2		(1)	c
		(2)	b
		(3)	d
		(4)	a
		(5)	b
		(6)	c
問題3		(1)	c
		(2)	c
		(3)	b
		(4)	d
		(5)	d
		(6)	a
		(7)	a
		(8)	d
問題4	1番	問1	b
		問2	d
	2番	問1	a
		問2	c
	3番	問1	b
		問2	d
問題5	1番	問1	a
		問2	c
	2番	問1	b
		問2	c
	3番	問1	d
		問2	a
問題6		(1)	d
		(2)	a
		(3)	b
		(4)	a
		(5)	d
		(6)	c
		(7)	c
		(8)	b

令和6年度 日本語教育能力検定試験 試験Ⅲ 正答

大問	小問	正答
問題1	問1	1
	問2	2
	問3	2
	問4	4
	問5	3
問題2	問1	3
	問2	4
	問3	2
	問4	1
	問5	4
問題3	問1	3
	問2	3
	問3	2
	問4	1
	問5	2
問題4	問1	1
	問2	4
	問3	2
	問4	4
	問5	3
問題5	問1	1
	問2	4
	問3	2
	問4	2
	問5	2
問題6	問1	3
	問2	1
	問3	2
	問4	3
	問5	3
問題7	問1	4
	問2	3
	問3	4
	問4	2
	問5	3
問題8	問1	1
	問2	2
	問3	2
	問4	1
	問5	4
問題9	問1	2
	問2	4
	問3	2
	問4	4
	問5	3
問題10	問1	2
	問2	4
	問3	4
	問4	1
	問5	2

大問	小問	正答
問題11	問1	3
	問2	3
	問3	1
	問4	1
	問5	4
問題12	問1	3
	問2	1
	問3	4
	問4	2
	問5	4
問題13	問1	1
	問2	1
	問3	3
	問4	4
	問5	2
問題14	問1	4
	問2	1
	問3	1
	問4	3
	問5	1
問題15	問1	4
	問2	1
	問3	3
	問4	3
	問5	1
問題16	問1	1
	問2	4
	問3	2
	問4	3
	問5	3

## 問題 17 記述式問題解答例

言語形式にのみ着目する FonFS に基づく言語教育は、現実の言語生活を反映しない、退屈なものになりがちである。一方今回の RP は FonM に基づく活動であり、タスク達成を第一に考えるという意味で真正性の高いものであるが、適切な言語表現の習得には貢献できない可能性もある。

そこで、実践的な言語活動をしつつ、学習者が自らの言語運用に対し意識を向け、気づきを得るよう促していくという FonF の活動を展開したい。例えば、RP を学習者自身のスマートフォンで録画した上で視聴し直し、「なぜここでこのような表現をとったか、他にどのような表現があり得るか」について振り返る、という活動が考えられる。その際学習者自身が、文法的正確さだけでなく、語用論的適切さや、より効果的な話の進め方などについても意識を向け、「どういう言語行動がよりふさわしいのか」を自ら考えるよう促すことで、日本語習得を総合的かつ自律的に進めていくことが期待される。

(394 字)